

在日外国人の孤立防止のためのスポーツ支援策の提言

立教大学松尾研究室 D

○常盤麻美

岩間敬晴

堀井友朗

1. 緒言

日本に住む外国人(以下「在日外国人」とする)は、1990年には約107万人であったが、2012年には約203万人を越えている。在日外国人にとって日本で暮らすうえで障壁となるものは、言語や生活様式の違いだと推察できる。しかし実際には、身近に理解者・相談者がいないことが在日外国人を孤立させてしまうという現状がある。グローバル化に伴い将来的に外国人が増加していくと予測される日本社会において、在日外国人が孤立せずに生活できる環境を整備することは急務である。

本提言では、世界共通の文化であるスポーツ(運動遊び)の力を活用することで、在日外国人が日々の生活の中で孤立しないための環境づくりを支援策として提言したい。

2. 現状と課題

2.1 在日外国人の人口について

- (1)1990年代以降、グローバル化により、在日外国人が増加。
- (2)国籍別では中国が約3割を占め、朝鮮・韓国、フィリピン、ブラジル、ペルーが続く。
- (3)男性は約90万人に対し、女性は約110万人で、女性の26%は日本人や外国人の配偶者または子ども(男性の場合は19%)。15歳未満の子どもは約18万人(9%)。

2.2 在日外国人向けの施策について

- (1)国や地方自治体が行っている施策は、公式文書・表示・案内の多言語化、日本語習得の支援、生活相談窓口の設置が主である。
- (2)NPOが中心に、施設にて国際交流会や生活支援を行う例はある。

2.3 聞き取り調査の結果について

- (1)フィリピン出身の在日外国人 E さんに、日本での生活について実際にどのような困難を抱えているのかを調べる目的で、2013年9月1日に聞き取り調査を行った。
→この調査から、在日外国人の E さんは理解者の夫の不在の増加のために孤立してしまったことがわかった。母国語で会話できる人がいなく、フィリピン人としてのアイデンティティが揺らいでいる。Eさんの孤立だけでなく娘の N さんの孤立も問題になっている。
- (2)埼玉県で在日外国人の自立支援活動を行っている NPO 法人「ふじみの国際交流センター」に、活動の課題と在日外国人の要望について調べるため、2013年9月18日に電話聞き取り調査を行った。

→この調査から、ふじみの国際交流センターは運営面で人員確保、情報発信などの課題があることがわかった。また在日外国人は身近に相談できる人がいないためにセンターにやってくるが、センターが支援をしても身近に相談できる人がいないままでは結局センター頼みになってしまうこともわかった。在日外国人のニーズとしては、生活相談が主である。

3. 「在日外国人孤立防止プロジェクト～世界の運動遊びを活用～」について

3.1 支援策を行う上でのポイント

スポーツに苦手意識を抱いている人であっても、誰でも簡単にできる「運動遊び」を実践することで、以前よりも簡単に同様の悩みを抱えている人とのつながりを得られる。また、参加者に多くのやり甲斐を感じてもらうために、「参加しやすく、主体性がもてる環境づくり」を目指す。そしてイベント開催後、継続的かつより深い交流を図るため、イベントを契機とした日常的な関係づくりをサポートし、在日外国人の孤立防止を支援する。

3.2 「孤立防止プロジェクト～世界の運動遊びを活用～」支援策の具体的展開

(1) 「ワールドプレイフェスタ実行委員会」の創設

(2) プログラム概要

- ・ 場所：子ども家庭支援センター、NPO 法人運営施設
- ・ 時間：フェーズⅠ～Ⅲを4ヶ月スパン、1週間に一度2時間実施する。
- ・ 対象：地域に在住する在日外国人・留学生(ベトナム・フィリピン・タイ)

(3) 各段階における具体的内容

①フェーズⅠ「出会い」

在日外国人と留学生を対象とした、イベント1「運動遊びでお国自慢」を開催し、出会いの場を設ける。「運動遊びでお国自慢」では、アジア圏の3ヶ国の「運動遊び」を各1種目ずつ取り入れ、チームをつくり1日に3種目を実践してもらう。実施される「運動遊び」が盛んな国出身である在日外国人の方にイニシアチブを握ってもらうことにより、自らのアイデンティティを確立する。

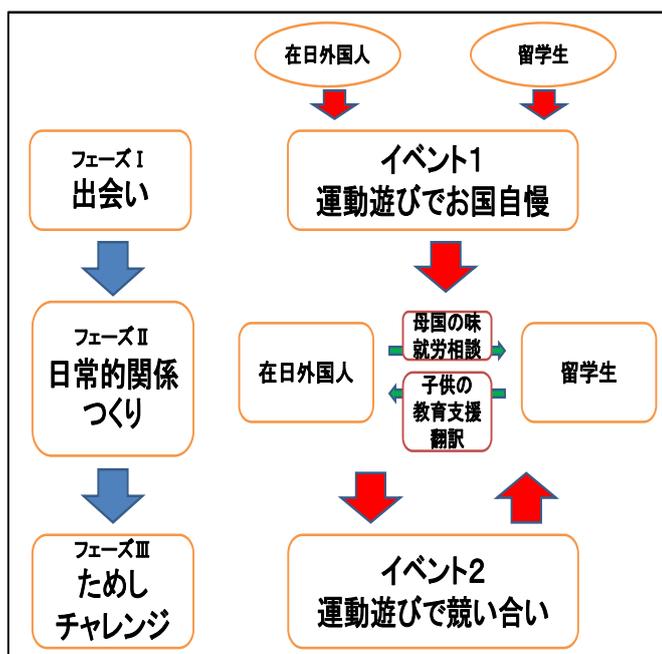


図1 孤立防止プロジェクト実施過程

②フェーズⅡ「日常的关系づくり」

「運動遊びでお国自慢」を通して出会った在日外国人と留学生の日常的关系をつくり出すためのサポートをする。在日外国人は留学生のために、「母国の味」と称された食事を開催し、就労相談にのる。また、留学生から在日外国人へは、子供の教育支援を始め、回覧板等の文章の翻訳を手伝う。さらに、3種目の「運動遊び」を練習し、イベント2「運動遊びで競い合い」で行われる大会に向け、技術の向上を目指す。

③フェーズⅢ「ためし、チャレンジ」

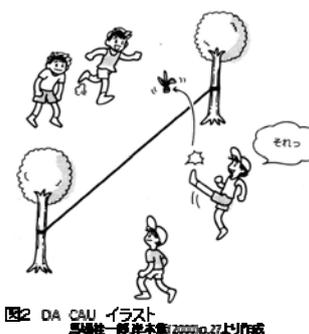
イベント2「運動遊びで競い合い」を開催する。「運動遊びで競い合い」とは、チーム戦で争い、3種目の「運動遊び」の総合得点で順位づけをする大会である。各チームがフェーズⅡで練習した成果を出し合い実力をためす。そうした過程が仲間と達成することへの喜び、そして協力することの大切さを知ることにつながる。また「運動遊びでお国自慢」開催後も在日外国人と留学生の日常的关系が続くためのサポートをする。

(4)「運動遊び」の具体的例 ～DA CAU～

国：ベトナム

人数：4人組の2チーム

遊び方：羽根を使って足で蹴る、バレーボールのような遊び



3.3 在日外国人へのアプローチと運営主体

(1) 在日外国人へのアプローチ

①アウトリーチ

アウトリーチとは、実際に「子ども家庭支援センター」が実施している方法であり、この方法を応用し、在日外国人の自宅に直接訪問することで普段あまり外に出ない引きこもりがちな在日外国人に対してもイベントの存在を告知することが可能である。

②パンフレット設置

市・区役所、産婦人科、保健所、外国人学校、外国系料理店など外国人が多く訪れそうな施設にイベントのパンフレットを置いてもらい、イベント実施情報が在日外国人の耳に届きやすくする。

③SNSの活用

Facebook、TwitterなどのSNSにおけるツールを活用し、イベントの開催を告知する。また、告知だけでなく、イベント開催後にはその日行った遊びの動画を毎回アップロードすることで、参加できなかった人はSNSを活用することで内容を共有することができ、参加した人も動画を視聴することで復習できる。

上述のSNSページをつくる際は、何ヶ国語かに翻訳したページをつくることで、より多くの在日外国人が視聴できる。その際の翻訳は、留学生や外国語が堪能な日本人に協力を仰ぐ。

(2) 「ワールドプレイフェスタ実行委員会」について

大学生ボランティア(留学に行きたくても行けない人、外国に興味を持っている人)が中心となり、「ワールドプレイフェスタ実行委員会」を創設する。ワールドプレイフェスタは、実際のイベント会場として利用する「子ども家庭支援センター」、「中高生センター」、児童館、そして直接運営に関わる留学生団体とそのネットワークと協力して運営する。また、在日外国人が訪れる可能性が高い場所として考えられる保健所、産婦人科、外国人学校、外国系料理店へはイベント実施のパンフレットを設置するなど、イベントへの集客面において協力してもらう。

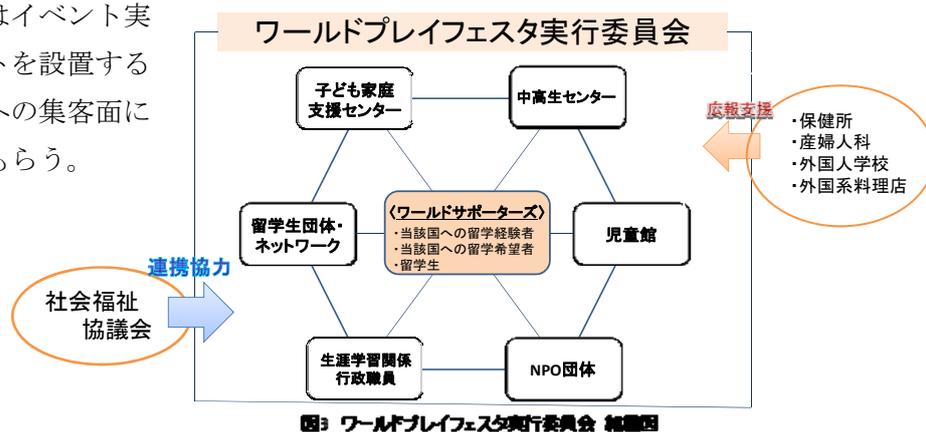


図3 ワールドプレイフェスタ実行委員会 組織図

4.期待される効果

- (1) 日常的に相談できる仲間ができることで孤立を防止することにつながる。
- (2) 4ヶ月スパンでイベントを行うことで、継続的な支援を行うことができる。
- (3) 在日外国人自身が母国の「運動遊び」を指導することで自信が生まれ、アイデンティティを確立できる。
- (4) 日常生活に「運動遊び」を取り入れることにより、孤立を防止するだけでなく生活環境の改善、また運動不足による肥満の防止、ストレス解消にもつながる。

<資料・文献>

- ・馬場桂一郎,岸本肇(2000)『世界の子どもの遊び事典』 明治図書出版
- ・介護保険・介護福祉用語辞典 <http://www.kaigoweb.com/alautorichi.html>
(最終アクセス 2013/09/24)
- ・「基礎自治体の外国人政策に関するアンケート調査結果」三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングホームページ http://www.murc.jp/publicity/press_release/press_130521.pdf
(最終アクセス 2013/09/24)
- ・「法務省「在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表」
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html
(最終アクセス 2013/09/24)
- ・豊島区公式ホームページ
<http://www.city.toshima.lg.jp/kodomo/kodomoshisetsu/index.html>
(最終アクセス 2013/09/24)